

幼児期のアレルギーについての調査（第一報）

—環境と健康のかかわりについて—

中京短大 ○梅村祥世 山内睦子 岡田悦政 安達和俊

目的 アレルギー性疾患の罹患者は近年増加の傾向にあると言われている。その原因として、環境汚染等生活環境の変化，食生活の変化，食品添加物の問題，過度のストレス，化学物質などのあらたなアレルゲンの出現によるその増加等が指摘されている。地域における幼児期のアレルギーの実態を知り、環境と健康のかかわりについて考察する。

方法 アンケート調査 対象：岐阜県瑞浪市中京幼稚園の園児241名およびその家族。時期：平成4年7月 調査事項：住環境，アレルギーの有無，アレルギー発病の時期，環境における原因，回数，症状，医師への受診療の有無，病名など（家族についても同事項）。

結果 3歳～5歳児の約40%にアレルギーがみられた。そのうち、その発病が生後6か月未満の者が約23%であり、約半数が乳児期に発病し、3歳までに85%が発病していて、入園前の発病が多いことがわかった。環境における原因では「食物による」が38.6%と一番多く、ついで「住居による」13.6%、その他薬剤・花粉等多彩に及んだ。回数では半数が5回以上繰り返し発症している。症状では「皮膚炎」63.0%、「喘息」17.0%、ついで「鼻炎」，「結膜炎」と続く。発症時殆どの者が医師に受療している。医師の初診察時の診断名は「アトピー性皮膚炎」60.5%、「気管支喘息」19.8%であった。さらに家族歴の結果等と比較すると環境における原因・症状などに大きな差異がみられた。